【研究ノート】

保育者の専門性と子育て支援者としての役割

砥上　あゆみ

Speciality of Childcare Worker and The Role of Childcare Support

By

Ayumi　TOGAMI

１．研究の背景と目的

近年の子育て家庭は、家族形態の小規模化、育児文化の未継承等による養育機能の脆弱さや子育て家庭の孤立等の要因により、子育てに困難や不安を抱える状況にある。このような社会状況の中で、保育所等の児童福祉施設でも、子どもへの保育と保護者への子育て支援をともにおこなうことが大きな課題となっている（柏女、橋本、2008 年）。

2008 年に改定された保育所保育指針（厚生労働省、2008 年）では、「保護者に対する支援」として独立の章が設けられ、「保育所における保護者の支援は、保育士等の重要な業務であり、その専門性をいかした子育て支援の役割は、特に重要なものである。」と明記されている。保育者が行う子育て支援は、「児童の保護者に対する保育に関する指導」であり、「保育の専門性を有する保育士が、保育に関する専門的知識・技術を背景としながら、保護者が求めている子育ての問題や課題に対して、安定した親子関係や養育力向上をめざしておこなう子どもへの養育（保育）に関する相談、助言、行動見本の提示とその他の援助業務の総体」と定義されている。さらに、保育者の子育て支援は、保育の知識や技術に加えて、保育ソーシャルワークや保育カウンセリングの知識や技術を援用することも求められている。しかしながら、保育者が従来から行ってきた支援業務や子育て支援の基本的視点が十分に整理・評価・体系化がなされていないまま議論が進められている（柏木、橋本、2008 年）。牧野（2012 年）は、保育者の保護者に対する支援業務については、十分な整理や体系化がなされていない現状にあり、保育者が子育て支援をどのように受けとめて、どのように行えばいいのかその方法論は未だ議論の途上にあると指摘している。保育者の子育て支援者としての役割を明確にするためには、保育者の子育て支援における専門的な視点を示す必要がある。

受理日　平成 26 年 12 月 5 日
純真短期大学こども学科　助教

2008 年に埼玉保育問題協議会が埼玉県の公立保育所に勤務している保育者を対象として行った調査では、保護者との関係でのストレスに関する項目において、ストレスを感じると答えた保育者は公立で 57.1%、民間で 52.9%いることがわかっている。同じ項目の自由記述欄には「保護者は自己中心的な人が多い」、「自分の子がよければいい考え方にあきれる」等の記述があり、保育者が保護者との関わりに葛藤を抱いていることが示されている（垣内、2011 年）。一方で、保育者は子育て支援に対して、「子育て支援は親のためであって、子どものためではない」、「親の甘えや依存心を助長してしまうのではないか」などの疑問や戸惑いが生じている（鈴木、2008 年）。このような背景には、保育者は子育て支援の必要性については認識していても、子育て支援が子どもへ還元されていないと感じている側面があるといえよう。つまり、保育者のなかには、子育て支援の対象は保護者であり、子育て支援と子どもへの保育を分化して捉えている視点がある。これからの子育て支援は親などの子育て行為者への支援を中心的な対象として捉えずに、育つ主体者としての子どもに焦点をあてることが必要であり、「子育て」と「子育ち」を分離せずに考えていくことが必要である（大豆生田、2008 年）。日常の子どもへの保育と子育て支援とが一体的に展開される支援が保育者の専門性をいかした子育て支援といえる。

子育て支援は、子育て家庭が抱えている問題やニーズを把握することから始まる。近年の子育て家庭は、結婚や家族におけるライフスタイルの選択が個人の主体性や選択を優先される「家族の脱制度化」現象により、今まで「例外」とされてきた離婚、未婚による出産も多様な家族のあり方として、社会に容認されやすくなった（松村、2010 年）。このような家族形態の多様化に伴い、子どもやその保護者の抱えている問題やニーズも一様ではない。その際、保育者個人の持つ固定的な家庭観にとらわれていると、現実の家庭の潜在的な問題を見失い、保護者との機能的関係がつくられず、支援ニーズのある家庭が埋もれてしまうことがある（松村、2010 年）。子育て家庭が抱える問題の把握は、問題の長期化や深刻化を防ぐためにも非常に重要な段階である。保育者の専門性をいかした子育て支援は、個人としての視点ではなく保育者の専門家としての視点が必要である。同じ子育て支援と呼ばれる行為を行っていても、その根底に流れる理念や目的が共有されておらず、誰が誰に対して、何のために行う支援なのか、「子育て支援とは何か」と問う必要性がある（大豆生田、2008 年）。保育者の子育て支援における子育て家庭の問題の把握の視点や子育て支援を通じて変容する親子を捉える視点は保育者固有のものがあると考え、それを明確に示す必要がある。

以上のような背景を踏まえ、本研究では、「保育者の専門性をいかした子育て支援者としての役割」を明らかにすることを目的とする。そのために、まず、保育者の子育て支援における子育て家庭の問題の把握、支援の対象および支援の目的と親子の変容の捉え方を分析し保育の専門家としての視点を抽出する。本稿では X 保育園での予備調査の分析結果を示すこととする。

2.予備調査の結果

2-1. 研究方法

子育て支援の役割を担う保育者の子育て支援そのものの捉え方の違いは、子育て家庭の問題の把握、対象、目的にも影響を与えると考える。本稿では、本郷（2010 年）の保育の場にお

ける家庭支援の枠組みを参照し、保育者が日常的に行っている子育て支援を、「問題の把握」、「支援計画」、「支援の実際」、「支援についての評価」の 4 つの段階で捉えていく。

予備調査は、無記名の自由記述式質問紙調査を行う。対象者には、本研究の背景、目的について説明を行い、個人が特定されないことと研究以外の目的で使用しないことを伝えている。

2.2 予備調査の実施と結果

予備調査は、X 保育園の保育者 11 名の協力を得ることができた。予備調査で使用した質問項目を以下に示す。また、担当クラスと子どもの人数、保育者の X 保育園での経験年数と他園での経験年数があれば記入をお願いした。（予備調査実施日：平成 26 年 12 月 1 日～2 日）

＜質問項目＞

【問題の把握】

①近年、養育力の低下、育児困難を抱えている親の増加等が指摘されています。親の養育力と関連していると感じられる“気になる” 子どもの姿、“気になる”親の姿はどのような姿ですか。

【支援の対象】

②子育て支援の対象者。

【支援計画・支援の実際】

③子育て支援の直接的関わり（送迎時、行事等）において心がけていることはありますか。

④子育て支援の間接的関わり（お便り帳、掲示物等）で心がけていることはありますか。

⑤保護者に子どもの姿を伝えるとき、ここを理解してくれたら（伝わったら）という願いがありますか。

【支援についての評価】

⑥日常的な子育て支援を実践し、保護者・子どもが変わったと思う瞬間はどのようなときですか。

【子育て支援の捉え方】

⑦今、求められる保護者（子ども）にとって必要な子育て支援とはどのようなものだと思いますか。

2-3.分析結果と本調査への課題

質問紙の自由記述式質問への回答を分析するために工夫された分析方法（舟島、1997 年、2007 年）を参照する。予備調査では、質問項目の①、②について、自由記述式質問への回答のデータ化と基礎分析（記録単位から同一表現単位に集約）を行う。分析方法は、自由記述式の質問への回答の素データを文脈単位から記録単位に分割し、記録単位一覧を作成する。次に、内容分析は、記録単位個々の意味内容の類似性に従い分類し、その分類に命名していく。“気になる子ども”の行動チェックリスト（本郷、2010 年）を参考にカテゴリを命名した。分類やカテゴリに違和感がないか X 保育園の主任保育者の助言をうけた。

さらに、子育て支援の対象を限定している保育者別に支援計画やプロセスの捉え方を総合的に考察する。

「問題の把握」

＜気になる子どもの姿＞

43 記録単位から、12 のカテゴリ（同一記録単位群）【不衛生】【基本的生活の未確立】【感情表出の乏しさ】【基本的不信感】【意欲のなさ】【無関心】【対人関係】【言葉の獲得の乏しさ】【発達の遅れ】【気質】【自己コントロール】【規範意識の乏しさ】に集約された。

（記録単位一覧表一部記載）

	気になる子どもの姿（素データーの文脈単位から記録単位へ）	カテゴリ
1	子どもの顔や洋服が汚れている	不衛生
2	生活リズムを考えずに、親の都合で子どもを連れまわしている。（登園が遅くなり、リズムが崩れる）	基本的生活習慣の未確立
3	基本的生活習慣が確立されていない	基本的生活習慣の未確立
4	食事の偏り	基本的生活習慣の未確立
5	表情が乏しい	感情表出の乏しさ
6	喜怒哀楽に乏しく、表情のない子ども	感情表出の乏しさ
7	母子、父子家庭等、子どもを過ごす時間が少ないため、子どもへの愛情不足を感じる。	基本的不信感
8	経験不足、成功体験不足からの自信のなさがみられる	基本的不信感
9	極端に確認するように表情をみながら同じことを繰り返す。	基本的不信感
10	遊びの中で、みんなができることができない	意欲のなさ
11	年齢や発達に応じた基本的生活習慣ができない、またはしようとしない。	意欲のなさ
12	意欲がない	意欲のなさ
13	自発性がない	意欲のなさ
14	依頼心が強い	意欲のなさ
15	家での遊びがタブレットやゲーム機のため、自分で遊びをみつけれない	意欲のなさ
16	何事にも無関心	無関心
17	遊びの邪魔をしたり、作っているものを壊したりする。	対人関係
18	意味もなく、友だちを傷つける	対人関係
19	子ども同士の会話で否定的な言葉が多い。（うるさい、だめ、ちがう、きらい、もう知らない）	対人関係
20	友だちを遊びへ誘えない	対人関係

＜気になる親の姿＞

33 の記録単位から、14 のカテゴリ（同一記録単位群）【不適切な養育：健康】【不適切な養育：食事】【不適切な養育：衛生】【不適切な関わり】【子どもを認めない】【子育てへの意欲のなさ】【親優先】【盲従】【矛盾】【親モデルの不在】【コミュニケーションの取りづらさ】【未成熟の親】【知識不足】【養育力の乏しさ】に集約された。

	気になる親の姿（素データーの文脈単位から記録単位へ）	カテゴリ
1	食事（量が少ない）情報源：連絡帳	不適切な養育：食事
2	「朝は食べていません」と平気で担任に言う、「保育園で食べてきなさい」という	不適切な養育：食事
3	1歳になっても母乳やミルクの食生活	不適切な養育：食事
4	健康（体調不良時の対応‥登園させる）	不適切な養育：健康
5	体調不良時の対応（受診しない、完治しない状態での登園）	不適切な養育：健康
6	ズボンのゴムがのびきっている、黒ずんでいるパンツを普通にもってくる	不適切な養育：衛生
7	子育てに意欲的ではない	子育てへの意欲のなさ（拒否的）
8	子どもを足でける、たたく、死ねと叱る	不適切な関わり
9	子どもの言動をすぐに否定する。 親の真似を子どもがしている。	不適切な関わり
10	子どもをほめたり、認めたりしない親	子どもを認めない
11	お休みでも登園させる	親優先
12	子どものことよりも自分のことを考える親が多くなってきている。	親優先
13	休日は自分のリフレッシュ時間にあて、子どもとの時間が少ない。	親優先
14	子どもが大人にあわせた生活リズム（就寝、食事、入浴、外出等）	親優先
15	子どもとの時間によりも親の時間を大切にする親が増えている。	親優先
16	子どもをペット、アクセサリー感覚の親	親優先
17	自分が第一で、自分の都合に子どもを合わせようとする親	親優先
18	親が赤ちゃんのままでいてほしいという思いや子どもへの甘えからか手をかけすぎている。	盲従
19	子どもの言うとおりに動き、子どもに振り回されている	盲従
20	噛みつきへの親の注意がよくなく、園で噛みつく。	盲従

「支援の対象」

＜保育者－子ども－保護者＞の統合化して捉える視点（大豆生田、2013 年）を参考に、子育て支援の対象を限定して捉えている保育者を限定群とし、子育て支援者の対象者に子どもを含めて捉えている保育者を統合群に分類した。

限定：【育児が初めての親】【仕事が忙しく育児ができない親】【子育ての協力者がいない親】
【仕事が忙しく不安や自責の念を抱えている親】【母親】

統合：【子どもと親】【保護者、子ども、祖父母】【保護者の支援から子どもへ還元】

2-4.保育者別、総合結果

子育て支援の対象者を保護者に限定している保育者の「問題の把握」、「支援計画」、「支援の実際」、「支援についての評価」の 4 つの段階で整理していく。

≪　限定群　≫

（1）保育者 A（1 歳児担当、1 年目）

A：「問題の把握」の視点

○　子ども：【不衛生】【基本的生活習慣の未確立】【対人トラブル】

○　親　　：【不適切な養育：健康】【不適切な養育：食事】

B：「支援の計画・支援の実際」

【園の子どもに関する情報提供】【育児の疑問・質問への情報提供】【助言】

【子どもの行動の原因】【家庭との連携】

C：「支援についての評価・変容プロセスの捉え方」

【助言した内容を保護者が実践】【子どもの情緒の安定】

支援の実際として、【情報提供】が多く、また【家庭との連携について】は保育園で実践していることを家庭でも実践して欲しいという願いがあり、【助言した内容を保護者が実践】したときに、保育者は保護者を肯定的に評価している。

（2）保育者 B（1 歳児担当、3 年目）

A：「問題の把握」の視点

○　子ども：【対人トラブル】【障がいの疑い】

○　親　　：【盲従】【不適切な養育：衛生】

B：「支援の計画・支援の実際」

【園の子どもに関する情報提供】【子どもの成長の喜びを共有】【助言】

【子どもの行動の原因】【家庭との連携】

C：「支援についての評価・変容プロセスの捉え方」

【保護者の笑顔が増えた時】【子どもの元気な様子】【子どもが友だちと遊ぶ姿がみられた】

支援の実際として、【子どもの成長の喜びを共有】というカテゴリを抽出した。【保護者の笑顔が増えた】という項目や、子どもの対人関係における変容を保育者は肯定的に評価

している。これは、保育者Aと同様に対象を限定しているものの、保護者への支援が子どもの変化にも繋がると捉えているといえる。また、保育の熟達度との関連性も考えられるため、経験年数を視野にいれた分析が必要となる。

（3）保育者C（0歳児担当、3年目）

A：「問題の把握」の視点

○　子ども：【基本的生活の未確立】【基本的不信感】【意欲のなさ】【無関心】
【言葉の獲得の乏しさ】【発達の遅れ】

○　親　　：【不適切な関わり】【親優先】【盲従】【矛盾】

B：「支援の計画・支援の実際」

【園の子どもに関する情報提供】【保護者自身の問題への気づき】【家庭との連携】

C：「支援についての評価・変容プロセスの捉え方」

【保護者の笑顔が増えた時】【保護者が子どもをかわいいということが増えた】
【保護者からの質問の減少】【不信や心配する姿の減少】

保育者Cの支援についての評価において、【保護者が子どもをかわいいということが増えた】というカテゴリが抽出された。これは、保育者A、保育者Bにはなかった親子関係に関する項目である。また、【保護者からの質問の減少】、【不信や心配する姿の減少】等、減少していくことを肯定的に捉える評価に関しても保育者 C のみに抽出できる項目である。

（4）保育者D（3.4.5歳児担当、3年目）

A：「問題の把握」の視点

○　子ども：【自制心の乏しさ】【規範意識の乏しさ】

○　親　　：【コミュニケーションの取りづらさ】【未成熟の親】

B：「支援の計画・支援の実際」

【園の子どもに関する情報提供】【相談しやすい雰囲気づくり】【受容】

C：「支援についての評価・変容プロセスの捉え方」

【子どもの対人関係における変化】【保護者からの信頼】

保育者Dの気になる子どもの姿は、0.1.2歳児とは全く異なっており、発達段階に応じた発達の見通しを保育者が持っていることが推測される。また保護者対応においては、同じ【情報提供】のなかでも、受容的な態度、優しい言葉等の保育者の姿勢に関する内容が表出している。

2-5.考察と本調査への課題

本稿では、X保育園の予備調査のデータをA.「問題の把握」の視点、B.「支援の計画・支援の実際」、C.「支援についての評価・変容プロセスの捉え方」にわけて予備分析をし、保育者

の専門家としての視点の抽出をおこなった。まず、A.「問題の把握」において、保育者には、気になる保護者の姿【盲従】が子どもの【意欲のなさ】に繋がっているというような親子関係に係る因果性の視点がある。また、気になる子どもと捉えている視点には個人の課題としての視点と他者との関係性の中での視点がある。さらに、子どもの発達段階と関連して捉えている視点があげられる。次に、B.「支援の計画・支援の実際」において、園での子どもの姿、育児情報等、多岐にわたる【情報提供】の支援が行われている。園での子どもの姿においては、保育者は保護者が子どもの姿や情景が浮かぶようにエピソードとして話すことや子どもの頑張っている姿やできたことを伝えることで子どもの成長に気づき、喜びを共有することを心がけている。さらに、【家庭との連携】においては、家庭と園での継続、統一した子どもへの関わりが必要だと保育者は考えている。そこには、子どもの理解において保護者と保育者の間には相違があり、その差異を相互理解していくことが保育者の子育て支援者の役割のひとつともいえる。最後に、C.【支援についての評価・変容のプロセスの捉え方】について、子育て支援の対象者を限定して捉えている保育者の評価のプロセスにおいて、【子どもの情緒の安定】【保護者が子どもをかわいいということが増えた】【子どもの元気な様子】【子どもの友だちと遊ぶ姿がみられた】の項目があがっており、子育て支援が子どもの変化へとつながっていることが示されている。つまり、子育て支援の対象者は保護者であっても、支援の評価や変容のプロセスを捉えるときには子どもへも視点が広がっているといえる。

保育者の専門家としての子ども理解の視点を保護者と共有することで、保護者の子ども理解の変容につながり、その変容が親子の関係や他者との関係性にも影響していくといえる。つまり、保育者の子ども理解の視点を保護者に伝えていくことが保育者の子育て支援者としての役割のひとつであるといえよう。

今回の予備調査では、日頃の保護者対応のなかで子育て支援につながっている実践を保育者が意識していないことが予測された。そのため、自由記述式質問紙調査では捉えきれていない実践があり、子育て支援の実際については半構造化インタビューを実施する必要がある。

保育者の子育て支援は、子どもへの保育と子育て支援が一体的に展開される必要がある。そこで、保育の現場で語られる子育て支援の実践から、保育者の専門的知識と技術がどのように活用され、子どもへの保育と子育て支援が統合的実践になり得ているのか、その実践の可視化をすることが課題となった。

今後は、保育者の語りのなかから子どもへの保育と子育て支援の統合的実践を捉え、保育者の専門家としての視点の抽出を蓄積し、保育者の子育て支援者としての役割を探究していく。

【参考文献】

・石川昭義、堀美鈴（2010 年）「今日の社会における子育て支援の意味と保育士の役割―犬山市の調査をもとにして―」『仁愛大学研究紀要 人間生活学部篇』第 2 号
・大豆生田啓友（2008 年）『支え合い、育ち合い、子育て支援―保育所・幼稚園・ひろば型支援施設における子育て支援実践論』関東学院大学 pp.35-59
・大豆生田啓友（2013 年）「保育の場における子育て支援の課題」『保育学研究』第 51 巻 第 1 号 pp.134-142
・太田光洋（2002 年）「“子育て支援”とは何かー子育て支援センターの活動への関わりをとおしてー」『保育の実践と研究』Vol.6 No.4 24 相川書房 p.13
・大日向雅美（2002 年）『母性愛神話とのたたかい』草土文化
・柏女霊峰（2003 年）『子育て支援と保育者の役割』フレーベル館 2003 年 pp.28-29
・柏女霊峰、橋本真紀（2008 年）『保育者の保護者支援―保育指導の原理と技術―』フレーベル館
・柏女霊峰他（2010 年）「児童福祉施設における保育士の保育相談支援（保育指導）技術の体系化にかんする研究（１）－保育所保育士の技術の把握と施設保育士の保護者支援」
・厚生労働省編（2008 年）『保育所保育指針』
・佐藤郁哉（2008 年）『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社
・鈴木佐喜子（2004 年）『時代と向き合う保育 上―生活・労働実態を保育の原点』ひとなる書房
・鈴木佐喜子（2004 年）『時代と向き合う保育 下―子どもの育ちを守ることと親を支えることのジレンマ』ひとなる書房
・垣内国光編（2011 年）『保育に生きる人びと 調査に見る保育者の実態と専門性』ひとなる書房
・原田正文（2006）年）『子育て支援の変貌と次世代育成―兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防』名古屋大学出版
・本郷一夫編（2010 年）『「気になる」子どもの保育と保護者支援』健帛社
・本田由紀（2008 年）『「家庭教育の隘路 子育てに脅迫される母親たち』頸草書房
・森上史朗、柏女霊峰編（2000 年）『保育用語辞典』ミネルヴァ書房
・舟島なをみ（2007 年）『質的研究への挑戦 第 2 版』医学書院
・牧野桂一（2012 年）「保育現場における子育て相談と保護者支援のあり方」『筑紫女学園大学紀要第 6 号』pp.179-191
・松村和子、澤江幸則、神谷哲司編（2010 年）『保育の場で出会う家庭支援論―家族の発達に目を向けて』健帛社
・向井美穂（2013 年）「第 8 章 保育所の子育て支援機能」『子どもの生活を支える家庭支援論』ミネルヴァ書房 pp.183-214